佛教研究 第三卷 第三號

三階教に關する隋唐の古碑（上）

神田喜一郎

一

隋の信行禪師の首倡した三階教は、其の教理の極めて獨創的であつて、當時の佛教教學の常軌に囚はれない一種の自由放膽な教相判釋を試みた點に於て、支那佛教史上、特に注意に値するものであらう。然るに歷代三寶記を始めとして、大唐內典錄、大周刊定衆經目錄、開元釋教錄など諸種の經錄に著錄せられた信行禪師の著書の既に夙くから全部散佚して終つた爲めに、(一)現今では僅に窺基の西方要決とか懷感の釋淨土群疑論とかの三四の書に偶々見えた三階教に關する記事を賴として、其の教理の大綱を漸やく窺知し得るに過ぎないのは遺憾である。(二)されば近く明治以來の佛教學者の中で、予の管見の及ぶ限りでは、河野法雲、佐々木月樵、今津洪嶽、岩崎敲玄等の諸師の如き、各々

此の三階敎に就いて特に論せられる所があつたが、[三]其の努力にも拘はらず猶ほ多少隔靴搔痒の感あるを免れなかつたのは、固り研究材料の至つて僅少なことゝて已むを得なかつた次第である。然るに大正六年の春、矢吹慶輝師の歐州より歸朝せられるに際し、端なくも三階敎の敎理研究の上に貴重な材料が齎らされ、從來暗中に摸索せられてゐたに過ぎなかつたものが俄かに一大炬火によつて照らされることゝなつたのである。其の所謂貴重な材料とは卽ち彼の英國の有名なスタイン博士が支那土耳其斯坦地方より將來した無數の古寫經の中から矢吹師によつて始めて發見せられた三階敎に關する數種の寫本のロートグラフであつた。[四]而して矢吹師は又それらの新材料を基礎として、「三階敎の普法に就いて」と題する精深邃密な研究を發表せられた。[五]意ふに三階敎の敎理は今後此の新材料によつて、更に益々闡明せられる所であらう。又是非さうあらねばならぬ筈である。

所で三階敎の歷史的方面に就いては如何であらう。若し之を道宣の續高僧傳や前記の諸種の經錄などの如き內典に見えた記事に求めるならば、既に河野、佐々木、今津、岩崎等の諸師によつて大體注意せられ、矢吹師の論文に至つては、一二の遺漏はあるにしても、[六]略摭拾し盡されたかのやうである。然しながら飜つて大唐內典錄や開元釋敎錄に見えた三階敎に關する記事を考へてみるに、隋唐の間、三階敎は異端邪宗として甚しく指彈せられ、屢々勅令を以て之が流布を禁斷せられさへしたけれども、猶ほ當時に於て可なり廣く道俗に信奉せられてゐたことは事實である。[七]從つて內典に見えた記事以外にも、何等か三階敎の歷史的方面に關する材料が多少は殘つてゐなければならないとは何人も容易に想像し得るのであつて、予は豫て之が注意を怠らなかつた。然るに近頃になつて始めて予は隋唐時代の古碑の中に三階敎の史料となるべきものが數多存在することを知り、乃ち私に曩日の豫想の空しくなかつたのを喜んだのである。意ふにそれらの古碑は從來佛敎學者に全く看過せられてきたのみならず、金石學者の間にあつても、特に三階敎の史料としては注意に上らなかつたやうである。それ故茲に聊か其の紹介を試み、併せて自ら多少考覈した所を附記して、敢て博雅の叱正を仰ぐことにした。倘し之によつて從來研究材料に至つて乏しかつた三階敎の歷史的方面に幾分なりとも寄與し得る所があるならば、偏に予が望外の幸である。

注(一)　信行禪師の著者は歷代三寶記卷第十二、大唐內典錄卷第五、大周刊定衆經目錄卷第十五、開元釋敎錄卷第十八、貞元新定釋敎目錄卷第十及び第十九等に各々著錄せられてゐるが、其の間多少の詳略異同が無いではない。それらのことは甞て今津洪嶽矢吹慶輝の二師によつて委しく論ぜられたことがあるから宜しく參照せられたい。注(三)及び(五)參照。因みに以下本文や注に於てこゝに擧げた諸種の經錄を引用する場合は、特に明記せない限り、今指示した所の卷第に據るものである。

注(二)　三階敎の敎理を多少なりとも窺知し得る材料としては、從來佛敎學者によつて、西方要決や淨土群疑論の外に、智儼の華嚴孔目章、華嚴五十要問答、賢首の華嚴五敎章、善導道鏡共集の念佛鏡、憬興の無量壽經連義述文賛などが擧げられてゐる。それから特に我が道忠の群疑論探要記を加へることを忘れてはならない。

注(三)　河野法雲、信行禪師の三階佛法、無盡燈第十四卷第四號、明治四十二年四月
佐々木月樵、支那淨土敎史上卷(二百七十一頁――二百八十一頁)大正二年一月、

今津洪嶽、信行禪師の事跡及其の教義、宗教界第十一卷第六號及び第八號、大正四年六月及び八月
岩崎敲玄、信行禪師の三階教、宗教界第十三卷第九號、大正六年九月

注(四)　矢吹師が英國から齎し歸つた三階教に關する寫本のロートグラフは、嘗て大正六年五月に東京の宗教大學に於て、矢吹師の滯英中に撮影せられた多くの古寫經のロートグラフと共に陳列せられ、一般の觀覽に供せられた。而して其の際陳列品の解說目錄を發行せられたが、後に其の解說目錄は宗教研究第二年第五、第六、第八の三號に亙つて再錄せられ、三階教斷片の部は正に第八號に載せられた。それから大正六年十一月、京都に於ける第三回大藏會にも、矢吹師は宗教大學に於けると同じ陳列を試み、又その解說目錄を第三回大藏會陳列目錄下として印行せられた。矢吹師が如何なる三階教の教理研究の材料を發見せられたかは、宜しくそれらの解說目錄を參照せられたい。

注(五)　矢吹慶輝、三階教の普法に就いて、哲學雜誌第三十二卷第三百六十九號、同第三十三卷第三百七十三號、第三百七十四號大正六年十一月、大正七年三月、同四月

注(六)　例へば唐臨の冥報記(高山寺本)卷上の劈頭に信行禪師及び其の弟子の慧如の傳が見えてゐるか全く注意せられなかつた然るに其の傳は道宣の續高僧傳に見えた信行の本傳と餘程出入する所があつて、信行の事蹟を知るには甚だ重要な材料なのである。

注(七)　その間の事情は開元釋教錄の記事が尤も委細を盡してゐる。而して其の記事は三階教の歷史を知る上に殊に重要なものと思ふから、今讀者の繙閱の勞を省く爲めに、茲に煩を嫌はず載錄しておかう。卽ち信行の著書の目を擧げた後に次の如く見えてゐる。右三階佛法及雜錄總三十五部。四十四卷。隋眞寂寺沙門信行撰。信行所撰。雖引經文。皆黨其偏見。妄生穿鑿。旣乖反聖旨。復冒眞宗。開皇二十年。有勅禁斷不聽流行。而其徒旣衆。蔓莚彌廣。同習相黨。朋援繁多。隋文雖斷流行。不能杜其根本。我唐天后證聖之元。有制令定僞經及雜符錄。遣送祠部集內。前件教門。旣違背佛意。別稱異端。卽是僞雜符錄之限。又准天后聖曆二年勅。其有學三階者。唯得乞食。長齋絕穀。持戒坐禪。此外輙行。皆是違法。逮我開元神武皇帝。聖德光被。普洽黎元。聖日麗天。無幽不燭。知彼反眞構妄。出制斷之。開元十三年乙丑歲六月三日。勅諸寺三階院。併令除去。隔障使與大院相通。衆僧錯居。不得別往。所行集錄。悉禁斷除毀。若綱維縱其所化。誘人而不糺者。勒還俗。幸承明旨。使革往非。云々。

二

三階教に關する古碑として、先づ第一に擧げたいと思ふのは信行禪師の舍利塔碑である。案ずるに道宣の續高僧傳卷二十に見えた信行禪師の本傳に據ると、信行が隋の開皇十四年正月四日を以て示寂したことを記した後に、

其月七日。於化度寺。送屍終南山鵄鳴之阜。道俗號泣。聲動京邑。捨身收骨。兩耳通焉。樹塔立碑。在于山足。有居士逸民河東裴玄證製文。云々

とある。然らば信行禪師を葬つた終南山の鵄鳴之阜には、明らかに裴玄證なる者の書いた信行の舍利塔碑が立てられたわけであるが、其の碑は一體如何なつたのであらうか。宋の有名な金石家である趙明誠の金石錄卷三に、

第四百九十六隋信行禪師碑開皇十四年正月

と著錄せられてゐるのは、卽ち疑もなく信行の舍利塔碑のことであらうから、宋代までは確に存在してゐた筈であるが、其の以後は殆ど金石の著錄から佚してしまつた。而して近く清朝になつて、古

今の金石を集大成したとも云ふべき王昶の金石萃編にも、將た終南山の所地たる陝西地方の金石を専門的に著錄した畢沅の關中金石記にも、均しく看過せられたのである。然るに今から凡そ百年位以前に編纂せられた黄本驥の金石萃編補目卷一、(八)を始め、後れては呉式芬の攈古錄卷二、及び趙之謙の補寰宇訪碑錄卷二(九)等に至つて、再び信行の舍利塔が著錄せられることになつてきた。尤も此等の書は簡單に碑目を擧げたに過ぎないのであつて、委しいことは分らないけれども、其後になつて出來た毛鳳枝の關中金石存逸考卷一(十)には、又た

信行禪師塔銘 正書 開皇十四年　逸

全文未見

汾陽韓子毅少尉恩湛碑目二。在陝西西安府。案此石久佚矣。

と見えてゐるのである。こゝに於て黄本驥や呉式芬等が如何して信行の舍利塔碑を著錄したのか稍疑はざるを得ないのであるが、又た全く何等原石なり拓本なりを見ないで之を著錄しさうな筈もない。從つて恐らく此の碑は宋代以後久しく土中に埋沒してゐたのが丁度今から百年位以前になつて再び出土したのであつて、毛鳳枝は偶々それを知らなかつたのであると推定するより外はない。然しながらそれは兎も角として、現今では信行の舍利塔碑の原名の存在することが顧燮光氏の古誌彙目や河南新碑目などによつて明らかとなつた。(十一)而して予も亦其の拓本を得たが、本誌の口繪に掲げたのが卽ちそれである。

今其の拓本によると、碑の高さは凡そ六尺二寸あり、幅は三尺あつて、中々の豐碑である。而して其の碑の本文は次に示す如くであるが、猶ほ題額として

故大信行禪師銘塔碑

の九字が三字づゝ三行に篆書で以て書かれてゐるのである。然し口繪の寫眞では碑の本文の字體を少しでも大きくして見易くさしたいと思つた爲めに已むなく其の題額を除いた。

茫茫佛海壯矣大聖之雄浩浩法池至哉波若之力世界窮□莫盡物性　以無邊淨土穢土之奇蹤一乘三乘
之妙理巍巍叵測蕩蕩難名苞括有無牢籠生□□□□資十聖德被三賢傳授有期住持無墜至如垂芳五濁
播跡千年紹佛日而不斷扇玄風而不滅者其惟我大師□□□師矣禪師姓王諱信行魏州衞國人也□世豪
宗茂菜於九㙛之上釋門貴種槃根於三界之中備之經史之文載之□□之藏盛哉不墜可得詳焉惟禪師苻
山岳之靈膺人天之福殖善因於往業託嘉運於今生故能體含至蹤父如來以入道性懷靈□□智慧以歸眞
生始沖年志逾成德慈悲被物解行超群大人見日之奇實珪璋之本質烏王入水之操□金石之性然但王不
易堅丹無改色鴻鵠遠志則自抱勾襟菩薩大名則生懷懿德於是披雜華之文起菩薩之行感波崙之志氣慨
童子之精誠誓欲洞達十二之文和會百家之說斯則鵬翼未成己有冲天之勢龍潛勿用不無飛漢之能體事
道眞心亡情習既非自善方慕師門遂能獨拔恩愛之纒孤遊信謗之域追末聞於慧菀訪奇行於禪林身虛檀

那之門踐有爲而成業志居波若之宅履無相以安心苦行苦而不疲惡各惡而不畏思翼翼慕道虔虔不以譽毀易心豈以存亡改節斯實體和至德性符玄道優游經緯之菀歷奉賢智之莚遂能披奥入微出異端於人情之外尋詮悟旨洞奇理於聖典之中但世遭五滓之邦時屬千年之下抓塵取喩地□爲倫□□惟常沒之言卓爾恠生盲之句於是以法驗人以時言敎邪正既別善惡區分信知學不當根甘露以之成毒藥應其□□寶所以名珍愍茲常倒之流啓茲普眞之路開生盲之眼目殖定死之根機使識賢聖之法門令知凡夫之行處遂於十二部經中撰對根起行法三十餘卷又出三階佛法四卷並行之於世斯則理出情外義超文表附骨間而起慮並而字而成章雨甘露於儉法之辰拔狗賊於斷常之世然智燈於長昏之夜導盲瞽於鬪諍之邦不說而說則開其未聞不言而言則到其末到超一乘之體法出三階之相文救邪錯之迷情息譏訕之謗口可謂智慧方便言辭應機優曇可逢斯□難遇者也然禪師解有比聖之能智有如愚之異故能辯四乘之性習驗三世之根機斷惡於無始之源集善於有生之際□□不識二果棄而俱甘於已莫知雙寶珍而並爲坐如如之宅處浩浩之年超違煩之林越怨親之境可謂一乘取決聲聞慧而是盲四依驗人菩薩凡而有眼名超九地響振三邦行德既分是非斯及□善人之不遇怨聖道之無時菩薩得□之秋羅漢亡身之曰雖欲泣血於荊山之下投軀於矢石之間吐世界之無常噫人生之難保嗚呼哀哉春秋五十有五以開皇十四年正月四日卒於眞寂寺即以其月七日送柩於雍州終南山鵄鳴埠屍陁林所捨身血肉求無上道生施死施大士有苦行之蹤內財外財至人有爲善之跡嗚呼哀哉無常力大賢智以之難免有生多累今古所以同然慧日翳於重雲□□沒於長夜嗟世間之眼滅痛舉道之梁摧情深廢社之悲志切崩城之至如素憧含煙以臨路霜車轉珮以從風遠悲天竺之名僧近歎王城之貴族於是悽傷朝市留連途路有識無識如盲失道之哀若見若聞如子亡親之痛悲連地岳怨動京畿善人既殞吾將安放於是法師淨名禪師僧邕徒衆等三百餘人夙以禪師爲善知識三業隨逐二十餘年俱懷出世之基共結菩提之友恒欲碎骨於香城之下投身於雪嶺之間生事莫由死將爲禮遂依林葬之法敬收舍利起塔於屍陁林下禪師生平之曰曾遊此處地連山路依然羊子之碑塔枕荒途髣髴滕嬰之墓唯恐世移季改身沒名沈古老或於訛言童稚絕於聞見故略其行德寄之金石使將來有識知舍利之在茲焉

迺爲銘曰

淵乎佛海　至矣大人　慈悲起行　智慧生身
居迷辯正　處僞能眞　智飛影沒　形亡道新

以上碑の本文は[十二]口繪の寫眞によつても分るが如く二十九行行四十七字に書かれ、凡て一千三百二十六字ある。これには何人の撰文で又何人の書になるものか誌されてゐないけれども、前に引いた續高僧傳の文によつて、裴玄證の撰文であることが明かである。而して恐らく其の書も亦同人の手になつたのではあるまいか。裴玄證の如何なる人物であるかは能く知れてゐないが、幸に續高僧傳の信行の本傳に少しばかり附傳があつて、それによると

證本出家。住於化度。信行至止。因又師之。凡所著述。皆委證筆。末從俗服。尙絕驕豪。自結徒

侶。更立科綱。返道之賓。同所繫贊。

とあるから、蓋し信行の餘程の高足であつたのであらう。矢吹師の論文には、六學僧傳卷第十三に此の續高僧傳にあると同じ事實を記した文を引用して、裴玄證の信行禪師に於けるは猶灌頂の天台大師に於けるが如きものであつたらうと言つてをられる。然らば其の信行の爲めに舍利塔碑を書いのも、固より當然のことである。

扨て此の碑の本文が信行の傳として、最古のものであり、且最も確實なものであることは言ふまでもない。(十三)今これを大體通讀するに、信行の事蹟を一々の事實に就いて具體的に言ひ表はしてはゐないけれども、内外二典の文字を縱横に驅使して、然かも其の間能く信行の行事と三階教の教理とを髣髴せしめてゐるのは、流石に信行の高足の手に成れるものなることを首肯せしめるやうである。意ふに此の碑文は三階教の教理的研究の上にも亦必ずや多少とも裨益する所があるであらう。予は之を世の佛教學者に質したい。但予は單に此の碑文によつて、續高僧傳に見えた信行の享年を訂正し得ることだけを注意しておかう。卽ち續高僧傳には信行の享年を以て五十四歲であつたと記してゐる。從つて其の示寂した開皇十四年から逆算して、信行の生年は梁の大同七年になるのであるが、此の碑文によると信行の享年は五十五歲であつたとあるから、其の生年も大同六年にならねばならない筈である。後世信行の傳を書く者は、皆續高僧傳を唯一の根據としてゐる爲めに、其の享年を以て五十四歲であつたと定めてゐるが、續高僧傳と此の碑文との史料としての價値は敢て優劣を說く必要もなからうから、無論此の碑文によつて訂正するを可とする。意ふにこれ單文孤證とはいへ、何人も容易に認容する所であらう。

信行の舍利塔碑の紹介は粗略ながら以上に止めて、次には此の碑と同じく終南山鵄鳴の阜に建てられた三階教徒の舍利塔碑に移りたいと思ふ。

注(八)　此書は聚學軒叢書本に據つた。

注(九)　此書は金石叢書本に據つた。

注(十)　此書の出來たのは光緒十五年であつて、金石萃編補目、攈古錄、補寰宇訪碑錄等が大抵道光から同治に至る間に出來たのに比し、六七十年乃至二三十年後れてゐるわけである。

注(十一)　古誌彙目初集には

僧信行塔銘、正書　開皇十四年　陝西長安

とある。然るに同じ著者の河朔新碑目には

故大信行禪師銘塔碑、正書開皇十四年正月湯陰

碑右側、正書　唐貞元十年再修塔記

とある。此の「僧信行塔銘」といひ「故大信行禪師塔碑」といふも、同一の信行の舍利塔碑を指したものに相違ないが、何故一は陝西長安に在りとし、一は河南湯陰に在りとしたのか、予には其の理由が全く解らない。同種のものが二つ存在することは到底考へられないことであるから、或はいづれか一が誤記であらう。元來此の舍利塔碑は終南山に建てられたものであるから、陝西長安と古誌彙目にある方が正しいかと思ふ。これは幸に著書の顧燮光氏が現在の人であるから、他日何

とか質してみたいと思つてゐる。然しいづれにしても此の古誌彙目、河朔新碑目の二書の著錄によつて、信行の舍利塔碑が何處かに現存してゐるといふことが窺はれるのである。

注(十二)　此碑の本文には、血の字を皿に作り、邦の字を郛に作るなど、多少の異字が見えてゐる。然し茲には排印の便宜の爲めに邢澍の金石文字辨異を參考として、通行の字體に改めておいた。

注(十三)　續高僧傳の信行の傳に「別有本傳流世。見費節三寶錄。」とある。これによると續高僧傳の以前に別に何人かの書いた信行の本傳があつたわけであるが現存せない。信行の傳としては現今では歷代三寶記に見えた傳が最古のものとせられてゐるのであるが、此の舍利塔碑は更にそれよりも古く、且確なことは敢て言を竢たない所である。因に今津洪嶽師の論文には續高僧傳の信行の傳に、「生自製碑。具陳已德。死方鐫勒。樹于塔所。即至相寺北巖之前三碑峙列是也。」とあるを引き、信行に生前自敍傳の作があつたと言はれてゐるが、それは今津師の失考ではなからうか。續高僧傳を讀んでみると、此の文は如何しても前後の關係から推して悲玄證のことを云つたものに相違ない。從つて信行に自敍傳のあつたといふことは認められないのである。

三

抑も續高僧傳卷二十二の西京慈門道場釋本濟傳に據ると、信行の高足であつた本濟は、其の寂後弟子の道訓道樹の二人によつて終南山の麓に葬られ、其處には塔を建て銘を立てゝ、其の德が表彰せられたとのことである。又本濟の弟の善智も深く信行に服してゐた者であつたが、亦示寂の後、終南山の信行の墓の右に附葬せられたとある。意ふに本濟は單に終南山の麓に葬られたとあるのみであるが、恐らく善智と同じく信行の墓の附近に陪葬せられたのであらう。即ち所謂鵄鳴の阜に葬られたものであると思ふのである。所が此の二人のみならず、後には三階敎徒は多く信行の墓に陪葬せられたらしく、現に猶それらの者の碑銘が五六種も傳つてゐる。(十四)即ち予の管見に上つた所では

化度寺故僧邕禪師塔銘　貞觀五年十一月
光明寺大德慧了法師塔銘　顯慶二年二月
化度寺僧海禪師方坟記　顯慶二年四月
道安禪師塔記　總章三年二月
澤王府主簿梁寺幷夫人唐氏墓誌銘　垂拱四年十一月
淨域寺法藏禪師塔銘　開元四年五月

等が皆そうである。今これらの古碑の一々に就いて紹介しやう。

先づ第一は化度寺故僧邕禪師塔銘である。僧邕の傳は續高僧傳卷二十三、義楚六帖卷十一、六學僧傳卷十四等に見えてゐるが、それらに據れば、僧邕は信行禪師と莫逆の間であつたことは疑ない。而してそのことは前に掲げた信行の舍利塔碑にも見えてゐるし、又續高僧傳の信行の本傳によつても窺はれるのである。(十五)所で續高僧傳の僧邕の傳を見ると、

以貞觀五年十一月十六日終於化度寺院。春秋八十有九。主上崇敬情深。贈絲帛爲其追福。以其月二十二日。奉靈魄於終南山。遵邕之遺令也。門徒收其舍利。起塔於(信)行之塔左。邕風範疑正。

行業精嚴。卑辭屈己。體道藏用。及委質寒林。悲纏朝野。僉以身死名滅。世有斯人。敢樹玄石。用陳令範。左庶子李伯藥製文。率更令歐陽詢書。文筆新華。多增傳本。故累誼野外矣。

とある。而して玆に李伯藥が文を製し、歐陽詢が書いたといふ舍利塔碑が、即ち今紹介しやうと思ふ所謂化度寺故僧邕禪師塔銘に外ならないのである。

扨て此の化度寺故僧邕禪師塔銘は歐陽詢の手書になつたといふので、古來書法の上から極めて激賞せられ、甚だ有名となつてゐるのであるが、實は其の原石が宋代以來破碎して終つて、今日では遺憾ながら一も完全な拓本を傳へてゐないのである。然しながら李伯藥の作つたといふ文章だけは、比較的完全な舊拓本を校讀することによつて大體窺知し得るのであつて、現に金石萃編卷四十三や全唐文卷一百四十二などには、其の全文が揭げられてゐるのである。然るに如何したものか、金石萃編に錄せられたものには誤謬が多く殆ど句讀さへ不可能である。從つて玆には全唐文に據つて、其の全文を錄してみやう。猶此の碑に關して、予は最近支那學誌上に多少論じておいたものがあるから、(十六)宜しく參照せられたい。

蓋聞人靈之貴天象攸憑稟仁義之和感山川之秀窮理盡性通幽洞微研其慮者百端宗其道三敎殊源異軫類聚群分或博而無功勞而寡要文勝則史禮煩斯黷或控鶴乘鸞有繫風之諭飡霞御氣致捕影之譏至於察報應之方窮死生之變大慈闕運宏濟群品極衆妙而爲言冠元宗以立德其唯眞如之設敎焉若夫性與天道契協神交貽照靈心澄神禪觀則有化度寺僧邕禪師者矣禪師俗姓郭氏太原人介休人昔有周氏積德累功慶流長世分星判野大啓藩維蔡伯喈云虢者郭也虢叔乃文王所咨郭泰則人倫所屬聖賢遺烈奕葉其昌祖憲荊州刺史早擅風猷父韶博陵太守深明典禮禪師含靈福地擢秀華宗爰自弱齡神識沈靜率由至道冥符上德因戲成塔發自髫年仁心救蟻始於丱歲世傳儒業門多貴仕時時方小學齒胄上庠始自趨庭便觀入室精神不倦聰敏絕倫博覽群書尤明老易然雅有志尙高邁俗情時遊僧寺伏膺釋典風鑑疎朗豁然開悟聞法海之微妙毛髮同喜瞻滿月之圖像身心俱淨於是錙銖軒冕糟粕邱墳年十有三違親入道於鄴西雲門寺依止稠禪師稠公禪慧通闕戒行勤苦道標方外聲溢區中闕靚暗投欣然嚮異即授受禪法數日便詣幽深稠公嘗撫禪師而謂諸門徒曰五亭闕念盡在此矣頭陀蘭若畢志忘疲仍來往林慮山中棲託遊處後屬周武平齊像往林慮入白鹿深山避時削跡藏聲戢曜枕石漱流闕巖之下葺茆成室蘿裳薜帶闕唯糞闕之衣餌求餐松嘗無麻麥之飯三遲斯絕百闕爲群猛鷙毒螫之徒潛形匿影白鹿青鸞之輩效祉呈祥每梵音瞻禮焚香讀闕二字奇禽異獸攢集庭宇俱絕闕倚畢來俯伏貌如恭敬心疑聽受及開皇之初宏闕釋敎於時有魏州信行禪師闕明佛性大轉法輪實命世之異人爲元門之益闕以道隱之辰習當根之業知禪師遯世幽居遣人告曰修道立行宜以濟度爲先闕善其身非所聞也宜盡宏益之方昭示流俗禪師乃出山與信行禪闕修苦行開皇九年信行禪師被勅徵召乃相隨入京京師道俗莫不遵奉信行禪闕三字之闕二字持徒衆以貞觀五年十一月十六日終於化度寺春秋八十有九聖上崇敬闕二字賵帛追福即以其月廿二日奉送靈塔於終南山下鴟鳴埠禪

師之遺令也徒衆收其舍利起塔於信行禪師靈塔之左禪師風範凝正行業精勤十二部經嘗甘露而俱盡五百具戒淩嚴霜而未彫雖託跡禪林遊心定水涉無爲之境絕有待之累闕寓形巖穴高步京華常卑辭屈已體道藏器未若道安之遊樊沔對鑿齒而自伐彌天慧遠之在廬山折桓元之致敬人主及還神淨土委質陁林四部奔馳十方號慕豈止寢歌輟相捨佩捐珠而已式昭景行乃述銘云

綿邈神理希夷法性自有成空從凡入聖於昭大士遊闕二字正德潤慈雲心懸靈鏡闕豪悟道捨俗歸眞累明成照積智爲津行識非想禪闕三字觀盡三昧情銷六塵結構窮巖留連幽谷靈應無像神行匪速敎彼開導去玆闕三字絕有憑群生仰福風火闕妄泡雷洞奔達人忘已眞宅斯存剎那闕二字淨域闕五字樂永謝重昏

化度寺故僧邕禪師塔銘の全文は以上の通りであるが、これが如何なる體裁に書かれてゐたか、即ち一行幾字宛幾行に書かれてゐたか、それらのことは原石の夙く破碎して終つて、僅に不完全な然かも剪裁した拓本より傳はつてゐない今日では一切知ることが出來ないのである。但以上の全文の他に、碑の首行に

化度寺故僧邕禪師舍利塔銘
右庶子李百藥製文
率更令歐陽詢

とあつたことだけは、現存の比較的善い舊拓本に據ると明瞭に知ることが出來る。(十七)所で以上の全文を讀んでみると、金石萃編に載せてゐるものよりは無論勝つてゐるが、猶それでも隨分句讀の出來ない個所が尠くない。然るに此の碑文と續高僧傳の僧邕の本傳とを比較するに、續高僧傳は全く此の碑文を簡略にしたに過ぎないものなることが明らかである。從つて多少續高僧傳によつて、此の碑文の讀み難い所を訂正し得る。例へば上記の全文の中に次の如き個所がある。

稠公禪慧通闕戒行勤苦云々

この通の字の下は一字闕けて分らないことになつてゐるけれども、續高僧傳によると

稠公禪慧通靈戒行標異云々

とあるから、通の字の下の字は必ず靈の字であつたことが分る。それから又今の句の二三行後の所に、碑文には

後屬周武平齊像往林慮云々

とあるが、何の意味か判然せない。然るに續高僧傳には

屬周武平齊象法隳壞云々

とある。從つて碑文の像の字の下には猶ほ原は三四字あつたものに相違ないと思はれるのである。斯樣にして精細に一々比較してゆくならば、此の碑文の全文は、假令その原石が佚してしまつたといへ、猶比較的舊い拓本を根據として略之を原形に還元することも敢て不可能でないらしい。予は更

に他日其の還元を試みたいと思つてゐる。然しながら其れは兎に角として、此の碑文の存在によつて三階敎徒の中でも殊に注目すべき僧邕禪師の事蹟をば、續高僧傳の載せてゐるよりも更に詳細に知り得ることは固り多幸と謂はねばならぬ。一體此の碑は書法上古來有名となつてゐることは前述の通りであるが、それにも拘はらず三階敎の歴史的研究の資料としては殆ど看過せられてきたのは如何したことであらうか。予は之を世の佛敎學者の前に提示して、更に其の精細なる考證を望まざるを得ない。[十八]

扨て次には光明寺大德慧了法師塔銘を紹介しやう。此の碑は古來の金石の書に餘り著錄せられず予の管見の及ぶ所では、僅に毛鳳枝の關中金石文字存逸考卷三と陸耀遹の金石續卷五とに見えてゐるばかりである。尤も陸耀遹の言ふ所では嘉慶の初年に初めて出土したものであるとのことであるから、古來の金石の書に著錄せられてゐないのは不思議でない。今金石續編に據つて、其の全文を示すと次の如くである。

大唐光明寺故大德僧慧了法師銘

法師□慧了俗姓宋氏若夫西京纂歷車騎建其英謀東漢握符司徒鼎其鴻業曾搆與靈山比峻昌原共德水倶長人物備在典□□烈煥乎篆籀法師道心天縱解行自然不假薰修已達四禪之趣無勞雕琢便登八正之途七歲出家久著老成之德十三依衆早識性相之原有信行禪師者釋氏之冠冕桑門之棟梁達究竟於沖襟窮權實於靈府濟群於正覺闢衆品於重昏一見法師歎之良久曰紹隆三寶非佛子而誰法師遊及三乘括囊十地闡龍宮之奧旨演鹿野之微言遠近歸依道俗鑽仰爾乃心敦寂滅志絕攀緣晦跡林泉韜光巖谷文帝旣行輪王之聖敎將窮正法之玄宗勅令太子太保宋公瑀大德僧內銓簡三人所以辟召法師方擬對揚宸極宋公共論法相鄙若便袪似遇天親如逢無著因而居□□範緇徒其有䌲腹決疑杖錫請法咸剖錯節倶釋盤根但□□居諸晦明迭代崦光易落閱水難留旣傷壞木之哥還切□舟之歎顯慶元年八月五日寢疾遷神於光明寺禪坊春□□十有四卽以二年二月十五日於終南山梗梓谷禪師□□□骨起塔昔郭泰飛英漢室尙勒無愧之文賈逵擅譽□□□□不朽之頌況津梁六道濟度四生理須播美緗緗□□□□□爲銘曰

偉哉開士道濟群生跨躡龍樹牢籠馬鳴□□□□□□□旣登勝果永斷無明

太子太傅尙書左僕射監修國史上柱國下缺

以上が卽ち光明寺慧了塔銘の全文であるが、陸耀遹の言ふ所では、全文二十四行、行二十四字、正書を以て書かれてゐるとのことである。[十九]而して陸耀遹や毛鳳枝は共に其の原石の猶ほ陝西西安府に存在してゐることを言つてゐる。

意ふに此の碑文によると慧了は信行禪師に就いて學び、後に唐の太宗の信任を得た者であるが、續高僧傳を始め其他の書にも一向傳が見えてゐない。然るにこの文中に宋公瑀とあるは、卽ち唐初

の功臣である。宋國公蕭瑀のことであるし、又一體この碑文の作者は何人か分らないが、毛鳳枝が關中金石文字存逸考に於て「太子太傅尚書左僕射監修國史上柱國」とあるを根據として推定してゐる通り、唐初の有名な宰相である于志寧に相違なからうと思はれる。從つてそれらの人と交游した慧了は當時にあつては中々立派な高僧であつたことが想像せられるのである。而して其の慧了が信行の弟子で三階敎徒であつたといふことは、三階敎の歷史上、亦一の隱れたる事實として極めて興味のあることではなからうか。何れにしても此の碑文によつて從來全く知られなかつた信行の弟子を知ることが出來るわけで、將來三階敎の歷史を書く者は是非之を參照すべきであると思ふ。

次には化度寺僧海禪師方墳記を紹介しやう。所で此の碑も從來餘り廣く世に知られなかつたらしく、金石萃編にも著錄せられてゐない。予の知る所では、畢沅の關中金石記卷二、孫星衍の平津館讀碑記卷四、同人の寰宇訪碑錄卷三毛鳳枝の關中金石文字存逸考卷三、朱士端の宜祿堂收藏金石記卷三等に見えてゐるのであるが、寰宇訪碑錄や宜祿堂金石記は單に此の碑の目を擧げてゐるのみであり、關中金石記、平津館讀碑記なども、極く簡單に此の碑の陝西西安府に存在することを一寸注意してゐるに過ぎないのである。然るに關中金石文字存逸考には、幸にも此の碑の全文を錄してゐるのみならず、それに關して多少考證さへも試みてゐるのである。今それに據つて、先づ全文を錄してみやう。

大唐化度寺故僧海禪師年六十六俗姓劉綏州上縣人也永徽五年八月十一日卒禪衆以顯慶二年四月八日於信行禪師所起方墳焉

僧海禪師方墳記の全文は、卽ち以上の如き至つて簡單なもので、關中金石文字存逸考には更に以上の全文を錄した後に次の如く考證を記してゐる。

寰宇訪碑錄云在長安。雍州金石記云在西安府城南百塔寺旁。僅五十餘字。而字劃不俗。故存之。案此石久逸。有重摹本。年六十六作六十有六。卒字下多一於字。末行又題顯慶三年歲次二月廿五日癸巳建。與雍州金石記所載。互有異同。不得原本。無從是正。姑兩存之以備考云。

卽ちこれによると、毛鳳枝は以上の全文を原拓本によつて錄したのではなく、雍州金石記から引用したのであるから[三十]、果して正しく原石の通りであるか如何か分らない。殊に重摹本と異同があるといふに於ては、到底之を絕對に信用することは出來ないのである。然しながら既に原石に佚してしまつたことであるから、兎も角毛鳳枝の錄した所によつて、大體僧海禪師方墳記の原文を窺知し得るのを幸とせねばならぬ。

猶海禪師その人の傳は他に全く所見なく、但この碑文によつて、斯樣な三階敎徒のあつたことを知り得るだけである。意ふにこれ亦隱れたる三階敎徒の一人として、三階敎の歷史を書くものゝ一顧に價しやう。

それから次は道安禪師塔記であるが、これは金石萃編卷五十七にも著錄せられ、其他の金石の書にも比較的多く見えてゐる。毛鳳枝の關中金石文字存逸考卷三には、此の碑を著錄して

關中金石記云在長安百塔寺。雍州金石記云今在西安府域南百塔寺旁。書法瘦硬可喜。案原石未詳所在。今有重摹本。

と言つてゐるが、陶齋藏石記卷十七に著錄せられてゐるのを見ると、其の原石は後に百塔寺から持去られ端方の手に入つたものと思はれる、端方の死後今日では何處へ行つたか分らないけれども、兎も角原石の存在してゐることは確であらう。今金石萃編や陶齋藏石記によつて、其の全文を掲げると次の如くである。

大唐故道安禪師姓張雍州渭南人也童子出家頭陀苦行學三階集錄功業成名自利旣圓他利將畢以總章元年十月七日遷形於趙景公寺禪院春秋六十有一又以三年二月十五日起塔於終南山鵄鳴埠信行禪師塔後志存親近善知識焉

この全文が八行、行十二字、正書を以て書かれてゐるとのことである。意ふに此の道安禪師も亦他に所見なく、隱れたる三階敎の信者として、前の慧了や海禪師と共に注意すべきであらう。

猶以下澤王府主簿梁寺并夫人唐氏墓誌銘を引續いて紹介すべき筈であるが、餘り多く紙數を要することになるから、次號に讓つておかう。

注(十四)　この事は後にも猶述べる考であるが、予は別に支那學誌上にも多少記しておいたことがあるから、是非とも參看せられたい。注（一六）參照

注(十五)　信行禪師と僧邕との關係は、猶冥報記卷上の信行のことを記した條にも見えてゐる。

注(十六)　拙稿「化度寺塔銘に就いて」支那學第二卷第九號（大正十一年五月發行所載）

注(十七)　化度寺故僧邕禪師塔銘の比較的古い舊拓本としては、楊守敬の望堂金石初集に收められたものなどを推すべきであらう。それらのことも多少委しく支那學に載せた拙稿に論じておいた。

注(十八)　これらの點も亦矢張り支那學に載せた拙稿を參看せられたい。

注(十九)　金石續編によると、以上の碑文の中で「文帝旣行輪王之聖敎」云々とある文の字、「勅令太子太保宋公瑀」云々とある勅の字及び「法師方擬對揚宸極」云々とある宸の字の三字に於て、原文では各々行欵を換つてゐる。

注(二十)　雍州金石記は朱楓といふ人の編纂に係り、矢張り陝西地方の金石を著錄したものである。而して惜陰軒叢書に收められてゐるのであるが、予は不幸にして本稿を草する際、之を參照する便誼を得なかつたのは遺憾である。